

一般財団法人 風に立つライオン基金

設立趣意書

一、本基金設立に到るきっかけ

・「夏 長崎から」と「貝の火運動」

1995年、戦後50年の年に始めた「ナガサキピーススフィア 貝の火運動」は、以後8年間の募金活動を実らせ、長崎から世界へ平和を発信する為の「ナガサキピースミュージアム」の建設に成功しました。

世界で一番小さなピースミュージアムですが、ボランティアスタッフを中心に、毎月、毎年平和についての催しや、アピールを続けています。

その「貝の火運動」のきっかけになったのは、1987年から20年間続けたコンサート「夏 長崎から」でした。

これまでの歴史を見れば分かるとおり、人々の平和が破られるとき、まず音楽の自由から奪われてきました。つまり、「音楽を楽しむ空間」こそ、音楽家としては最も護らなければならない「平和」の場所なのです。

しかし、「音楽現場を護る」という思いはなかなか伝わりにくい物でした。

それで具体的な言葉を使ってメッセージすることにしました。

「このコンサートが終わるまでの間に、ほんのひとときで良いからあなたの大切な人の“笑顔”を思い浮かべて下さい。そしてその大切な“笑顔”を護るために、一体自分に何が出来たかを考えて下さい。その大切な笑顔のために出来る事へ向かってきちんと歩いて行きましょう」という僕なりの『長崎アピール』を続けてきました。

それは今も少しも変わりません。むしろ今こそこのアピールをもっと強く発信するべきだとも思っています。

音楽家の力は更に強く試される時代に入りました。

・東日本大震災

2011年3月11日午後2時46分。

千年に一度という大津波被害を受けた東北三県の被害の甚大さに人々は心を凍らせ、言葉を失い、恐怖と同情に震えました。

何をすれば良いのか、出来る事はあるのか、途方に暮れ、呆然とし、涙ばかりを流しました。

このままではいけないと我に返り、何かをしようとしても、つまりはおのれの力のなさにため息をつくばかりでした。

音楽家の出来る事をする。

まずは声を挙げて応援を始めること。

そう自分に言い聞かせました。

私達のコンサートなどにも多額の支援金が寄せられました。

毎年毎年それを続けて4年が過ぎました。

しかし厳しい被害を受けた場所は、未だに何も変わらない。

場所によって公的援助の差がありすぎる理由を、知れば知るほど愕然とし、失望し、怒りを覚えています。

私達の個々の力は、それほど小さく弱い物なのでしょうか。

一体、国の援助や、地方自治体の働きとは、誰のためになにをなすものなのでしょうか？
必要な場所に必要な物が届かない。

この災害で必要な人に必要な物を、何も怖れずに、何者にも縛られずに届ける勇気が最も大切な事だ、と学びました。

・風に立つライオン

1972年、長崎で巡り会った柴田紘一郎医師のアフリカ体験に感動しました。

彼は長崎大学熱帯医学研究所に出向し、ケニアでの僻地医療にも従事して戻ったばかりでした。

彼のアフリカを歌いたくて毎年努力をしましたが、歌というものはそのテーマを歌うに相応しい「裏付け」がおのれの胸の内になければ形にならないのです。

ようやく15年をかけて1987年に発表した楽曲が「風に立つライオン」でした。

バブル絶頂期にリリースしたこの曲はシングルとしては全くヒットしませんでした。

しかし、この歌は静かに沢山の人の心に広がって行きました。

いつの間にか医療関係者や、JICAの職員、青年海外協力隊員、海外で暮らす商社マンや、外交官まで、この歌を心のテーマ曲として携えてくれるようになりました。

やがて大沢たかおさんの強い希望でこの歌を小説化し、更に映画化されたことにがきっかけで、昨年、僕は初めてアフリカへ渡りました。

サバンナの、地球の息吹のような、果てしない時空を超えて吹くような風をこの身に感じたとき、感動に震えました。

僕は何故、自分では一度も来たことがないこのアフリカの歌のタイトルに「風」の文字

を置いたのだろうか。

そう思ったときに腑に落ちました。

この歌は僕が作った歌、などではなく、偶然僕が「頂戴した」歌なのだということに、です。

きっと神様から頂いた歌だからこそ、これ程沢山の人々の心に働きかけたのに違いありません。

ケニアで頑張る日本人女性の小児科医師公文和子さんと出会いました。

スーダンで頑張る川原尚行医師は命懸けで僻地医療を行っています。

ミンダナオ島では烏山逸雄さんが孤児院を運営しながら頑張っています。

「風に立つライオン」は世界中に存在するのです。

いつからか、僕にはこの歌を「神様から貰った」責任がある、とを感じるようになりました。

既にこの歌は僕のものではなく、神様の望んだとおりに、沢山の人々の心に届いているのです。

では自分に何が出来るのか。

今こそ、迷わず、怖れず、思いを行動に移すべき時が来た、と感じています。

二、「一般財団法人 風に立つライオン基金」

これまでに述べてきた理由から、「一般財団法人 風に立つライオン基金」を設立します。目的はおおまかに3つです。

はじめは、「夏 長崎から」や「貝の火運動」で提唱した事の実現です。

大切な人の笑顔を護る、というとても単純で、とても難しいことを実際に行うための行動を開始します。

国や県、或いは市といった大組織では目の届かぬことが我々の視線の最も大切なところだと思います。

ささやかでも、個々人の人生の小さな支えになるよう、細やかな援助をしていきます。

2つ目は、我が国で起こりうる可能性のある災害や事故に対する積極的な支援が出来る体制を整えます。

これも国や県、或いは市といった大組織ではフォローしにくい、或いは目の届かない場所や人を支援します。

金銭的、経済的支援にとどまらず、人的支援を行える組織作りまで視野に入れて活動します。

一人の力は小さくとも、沢山集まれば強くなります。

「人を支援しよう」という意志と目的を見失わず、同胞のみならず、外国の人でも、我々の手の届く範囲の人々を支えたいと思います。

3つ目は、「風に立つライオン」という歌を作った責任から思いついたことですが、海外で慈善活動を行う邦人の経済的支援です。

海外で頑張る同胞を具体的に支援するため方法を考え実行します。

個人では出来ない「長いスパン」での援助活動を行うためにはきちんとした組織が必要です。

できうる限り恒久的に援助の出来る仕組みを作ります。

三、まとめ

我々は、小さな『志』の集合体です

我々はささやかで偉大な活動を行う人を応援します。

我々は災害に苦しむ人を支援します。

我々は大切なひとの笑顔を護るための「平和」について考え、活動します。

一人一人の小さな思いが、沢山の小さな生命を支えられることを信じます。

「風に立つライオン基金」はその為の組織です。

以上が本基金を立ち上げるに到った趣意です。

実現いたしましたら、具体的な活動については逐次ご報告し、細かに説明いたして参ります。

2015年 夏

さだまさし